

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集

# 市内遺跡発掘調査概要報告書XII

西都原地区遺跡  
日向国分寺跡

2007

宮崎県西都市教育委員会

# 序

西都市教育委員会では市内遺跡発掘調査事業として、平成7年度より日向国分寺跡の確認調査、平成10~15年度に西都原台地のたばこ耕作天地返しに伴う確認調査を実施してまいりました。

西都原台地のたばこ耕作天地返しに伴う確認調査は、平成17年度に調査報告書を行し調査を終了しましたが、今年度、新たに要望がなされたことから実施しました。

調査の結果、第84地点では旧地形に沿った溝、第85地点では弥生時代の堅穴住居跡を確認することができました。

一方、日向国分寺跡確認調査は、昨年度までの調査でほぼ伽藍内の調査可能箇所の調査を終えましたが、これまでの調査で金堂跡・塔跡・南門跡などの主要建物の所在が明確にできていなかつたことから、これらを確認することと、また、伽藍外側を廻る区画溝の北東端の有無を確認することなどを目的に調査を実施しました。

調査の結果、川原石を数段積み、その内側を版築状に叩きしめたと予想される推定金堂基壇跡、その南南東に円形に川原石を3段ほど積み上げた石組み遺構を検出することができました。南門跡・区画溝北東端は後世にかなり削平を受けていると予想され検出できず、また、塔跡と予想される遺構は全く検出できなかつたことから、西塔配置の可能性は薄くなりました。また、新たに推定南門跡西側から10世紀代に掘削されたと予想されるかなり大規模な東西掘り方が検出され、多くの遺物が出土しました。

これら調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なことです。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたりご指導・ご協力いただいた日向国分寺跡調査指導検討委員会の先生方、文化庁記念物課、宮崎県教育庁文化財課をはじめ、発掘調査・整理作業に携わっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成19年3月30日

西都市教育委員会

教育長 三ヶ尻 茂樹

# 例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受け、平成18年度実施した市内遺跡発掘調査（西都原地区遺跡・日向国分寺跡）の概要報告書である。
2. 平成18年度の調査は、西都市大字三宅字西都原他に所在する西都原台地上のたばこ耕作に伴う天地返し地点の3地区と西都市大字三宅字岡方に所在する日向国分寺跡5地区を対象に確認調査を実施した。調査は、西都原地区遺跡は平成18年11月7日から平成19年1月10日、日向国分寺跡が平成18年8月3日から平成19年3月28日まで実施した。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 本書の執筆及び調査、図面作成等は、第I・II・IV章を笠瀬明宏、第III章を義方政義が担当した。
5. 本書の編集は、笠瀬明宏が担当した。
6. 本書に使用した方位は、Fig. 1、6～10は平面直角座標系第II座標系であり、Fig. 2～5は磁北である。この地点の磁北は真北より $6^{\circ} 10'$ 西偏している。
7. 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
8. 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版 標準土色帳』に準拠した。
9. 本文中の(註)はそれぞれの章で番号を付した。

## 目　　次

### 第Ⅰ章　序　　説

第1節　調査に至る経緯	1
第2節　調査の体制	1

### 第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

第1節　現況と調査区の設定	5
第2節　調査の記録	7
第3節　小結	10

### 第Ⅲ章　西都原地区遺跡の調査

第1節　これまでの調査成果と概要	11
第2節　調査区の設定と構造	13
第3節　小結	18

### 報告書抄録

## 挿図目次

Fig. 1	西都原古墳群周辺位置図(1/25,000)
Fig. 2	西都原地区遺跡調査地点位置図(1/10,000)
Fig. 3	第84地点構実測図及び土層図(1/200・1/40)
Fig. 4	第85地点構分布図(1/1,600)
Fig. 5	第85地点住居跡実測図・出土遺物実測図(1/40・1/4)
Fig. 6	日向国分寺跡第12次調査箇所位置図(1/1,000)
Fig. 7	A区2・3トレンチ平面実測図(1/50)
Fig. 8	B区1～4トレンチ平面実測図(1/100)
Fig. 9	C区1トレンチ平面実測図(1/50)
Fig. 10	D区1～3トレンチ平面実測図(1/100)

# 第Ⅰ章 序 説

## 第1節. 調査に至る経緯

西都原地区遺跡の調査は、平成10～15年度に確認調査を実施し、平成17年度に報告書を発刊し調査を終了していたが、昨年度、新たに土地所有者からたばこ耕作に伴う天地返しの要望があつたことから、急遽、確認調査を実施することとなり、第83～85地点とし調査を実施した。

日向国分寺跡の調査は、西都市教育委員会が調査を始める以前、過去3度の調査が実施された。それは、昭和23（1948）年度の早稲田大学で組織された日向考古調査団、昭和36（1961）年度の九州大学及び宮崎県教育委員会、平成元（1989）年度の宮崎県教育委員会による確認調査である。しかし、それら調査では伽藍配置について明確にされておらず、建物としては僧坊跡ないし食堂跡と推定される2時期の掘立柱建物跡が確認された程度であった。当地域は、昭和36年度当時の周辺写真と現在を比較すると寺域内外の宅地化が著しく、伽藍配置の確認が急務となつた。

のことから、西都市教育委員会は平成7年度より国庫補助を受け、日向国分寺跡の主要伽藍配置及び寺域の確認調査を実施してきた。今年度は、この最終年度として確認調査を実施した。

## 第2節. 調査の体制

調査主体	教 育 長	三ヶ尻 茂樹
	社会教育課	伊達 博敏（課長）
		楠瀬 寿彦（課長補佐）
		重永 浩樹（文化財係主査）
		津曲 大祐（文化財係主事）

調査担当	[西都原地区遺跡] 義方 政幾（文化財係係長）
	[日向国分寺跡] 笠瀬 明宏（文化財係主任主事）

調査指導	小田 富士雄（福岡大学名誉教授）
	山中 敏史（独立行政法人 奈良文化財研究所 文化遺産部）
	箱崎 和久（独立行政法人 奈良文化財研究所 都城発掘調査部）
	柴田 博子（宮崎産業経営大学助教授）
	日高 正晴（西都原古墳研究所長）
	吉本 正典（宮崎県教育庁文化財課主査）

発掘作業	緒方タケ子・篠原時江・浜田スミ（西都原地区遺跡）
	押川ツル・金丸美保・黒木トシ子・横山ナオ子（日向国分寺跡）

整理作業	長谷川明美（嘱託職員）、中原昭美・黒木文子・吉留直美（整理作業員）
	以上、敬称略

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西、標高50～80mには通称西都原と呼ばれる台地がある。この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積世台地で、台地東側には南北帶状に標高約20～30mの中間台地が延び、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。西都市街地はこの沖積平野に位置し、この平野の北から東側を宮崎県で第3位の水量を誇る一ツ瀬川が蛇行する。

西都原台地及び中間台地上には、陵墓参考地である男狹穂塚・女狹穂塚を始め、前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された国指定特別史跡「西都原古墳群」が所在する。これら古墳の他に、南九州的墓制とされる地下式横穴墓が現在までに12基、斜面に墓道が斜めに穿たれ、それに玄室が取り付く横穴墓と地下式横穴墓の折衷型とされる横穴墓群も確認されている。

西都原台地の北西端には、縄文早期の集石遺構及び後期の土器片・土錐が多量に検出された宝財原遺跡、台地北東端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡20軒などが検出された集落跡である新立遺跡などが所在している。西都原台地が墓域として選地された結果、台地上の生活遺構は極端に減少するが、台地南端の寺原集落には古墳時代の大集落跡が所在していることも予想されている。

西都原台地北東側の中間台地には、平成12～13年度にかけての調査で地下式墓寄生型消失円墳や消失円墳を始め、多くの地下式横穴墓が点在していることが明らかになった堂ヶ嶋第2遺跡も所在する。本遺跡の発見により中間台地一帯が古墳時代終末期の墓域であることも明確になった。

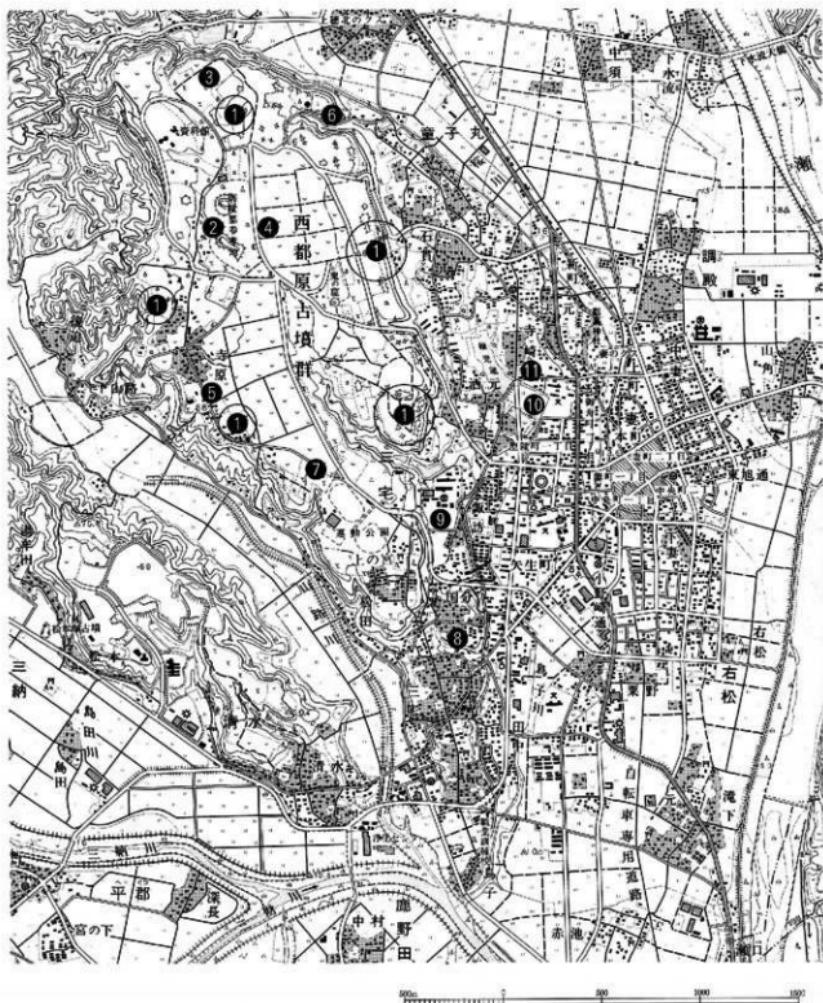
西都原地区遺跡は西都原台地上に所在し、寺原・丸山・原口・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼称である。原口遺跡は台地南側、寺原遺跡は原口遺跡の北側で、現在の寺原集落を中心とした地域、丸山遺跡は台地北側、西都原遺跡は台地中央部から東側にかけての地域である。これら遺跡の内、丸山遺跡からは縄文時代早期の集石遺構や弥生時代中期から後期初頭の竪穴住居跡、原口遺跡からは丸山遺跡同様に縄文時代早期の集石遺構や弥生時代後期後半から終末期及び古墳時代後期の竪穴住居跡、西都原遺跡からは弥生時代後期の竪穴住居跡、そして、寺原遺跡からは弥生時代終末の竪穴住居跡などが確認されている。

西都原台地の南端には產土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になる。この中間台地上には北に日向国府跡、その南西の妻高等学校敷地内に日向国分尼寺跡（推定）も保存されている。

日向国分寺跡は、西都原台地と西都市街地の西側に延びる中間台地中央に所在する。北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷に囲まれ、寺域は方2町の規模を有すとされてきた。本地域は急速に宅地化が進み、現在の木喰五智館内に展示されている木喰仏を以前安置していた旧堂宇の礎石、金堂跡と推定される地点に数個点在している礎石のみが国分寺の面影を忍ばせる。

また、国分寺跡は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であり、近年、宮崎県教育委員会の調査により国分寺跡から北東に直線距離で約1.2kmの寺崎・法元地区に日向国府跡が確定された。国府跡については、正殿と脇殿がコの字型配置をとり西側からは築地塀跡などが確認されている。

このように、西都原台地上はもちろん、日向国分寺跡・同尼寺跡・日向国府跡が所在する中間台地は、古代日向国の政治及び宗教活動の拠点として大いに栄えた地域であった。



1. 西都原古墳群      2. 陵墓参考地 (男狹穗塚・女狹穗塚)  
 3. 丸山遺跡      4. 西都原遺跡      5. 寺原遺跡 (西都原地区遺跡)  
 6. 新立遺跡      7. 原口第2遺跡      8. 日向國分寺跡  
 9. 日向國分尼寺跡      10. 妻北低湿地      11. 寺崎遺跡 (日向國府跡)

Fig. 1 日向國分寺跡周辺位置図 (1/25,000)

(註及び参考文献)

- (1) 西都市教育委員会「西都原地区遺跡Ⅱ」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第44集 2006
- (2) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949
- (3) 宮崎県教育委員会「日向国分寺址」『日向遺跡総合調査報告』第3号 1963
- (4) " 『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告』III 1991
- (5) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書I」  
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996
- (6) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書II」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997
- (7) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書III」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998
- (8) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書IV」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第28集 1999
- (9) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書V」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第29集 2000
- (10) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書VI」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第30集 2001
- (11) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書VII」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第31集 2002
- (12) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書VIII」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第36集 2003
- (13) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書IX」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第40集 2004
- (14) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書X」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第41集 2005
- (15) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書XI」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第46集 2006
- (16) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (17) 西都市教育委員会「宝財原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第20集 1994
- (18) " 「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- (19) " 「堂ヶ嶋第2遺跡」『西都市埋蔵文化財調査報告書』第33集 2003
- (20) (6)と同じ。
- (21) (1)と同じ。
- (22) (6)と同じ。
- (23) (1)と同じ。
- (24) (6)と同じ。
- (25) (1)と同じ。
- (26) (1)と同じ。
- (27) (1)と同じ。
- (28) (1)と同じ。
- (29) 西都原古墳研究所『西都原古墳研究所・年報』第11号 1994
- (30) 西都市教育委員会「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集 1985
- (31) 西都原古墳研究所『西都原古墳研究所・年報』第5号 1988
- (32) 西都市教育委員会「上尾筋遺跡・下尾筋遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第11集 1990
- (33) 江戸時代中期、全国を行脚する木喰五行が日向を訪れた際、国分寺跡に立ち寄った。翌年、火災により荒廃して  
いた伽藍や安置されていた本尊は全て消失してしまった。そこで木喰五行は国分寺再興の祈願を立て、5体の影  
像に取りかかった。そうして完成した仏像5体が木喰仏、つまり、木喰五智如来坐像である。
- (34) 宮崎県教育委員会「寺崎遺跡」『国衙跡保存整備基礎調査報告書』 2001

## 第Ⅲ章 西都原地区遺跡の調査

### 第1節 現況と調査区の設定

西都原地区遺跡については、これまでに圃場整備をはじめ駐車場整備や道路拡幅工事に伴う発掘調査を行い、縄文時代早期の集石遺構及び焼穀群、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡、古墳時代初めから前期の竪穴住居跡、古墳時代の地下式横穴墓、さらには、横穴墓と地下式横穴墓との折衷形として注目された古墳時代後期の横穴墓など各時代を通じた多種多様の遺構を検出している。

これらは、位置的には、そのほとんどが西都原台地縁辺部に集中しており、台地中央部からは弥生時代の竪穴住居跡が検出されているものの、遺構密度はかなり薄いことが判明している。また、西都原台地上からは古墳の築造に関連した人々の遺構があまり確認されないことから、台地上特に陵墓の東側を中心とした地域は古墳を築造する特別な空間、いわゆる聖域として認識していたものと想定される。

これら遺構のなかで横穴墓については、国の「地方拠点史跡等総合整備事業」（歴史ロマン再生事業）のなかで保存・活用されることになり、「西都原古墳群遺構覆屋」が平成11年度に建設され、一般公開されている。

なお、この事業は宮崎県教育委員会が主体となり、平成7年度から進められているもので、これまでに「鬼ノ窟古墳」をはじめ「13号墳」・「100号墳」・「171号墳」・「地下式4号墳」等の調査研究及び保存整備が図られ、平成16年度の「宮崎県立西都原考古博物館」の完成で一応の事業完了となった。

現在は、宮崎県立西都原考古博物館が主体となり、これまでのように大規模ではないが、陵墓である男狹馴塚の形態を特定するための地下レーダー探査、46号墳の確認調査や111号墳の復元整備（「西都原古墳群歴史ロマン再生空間形成事業」）等が年次的に進められている。

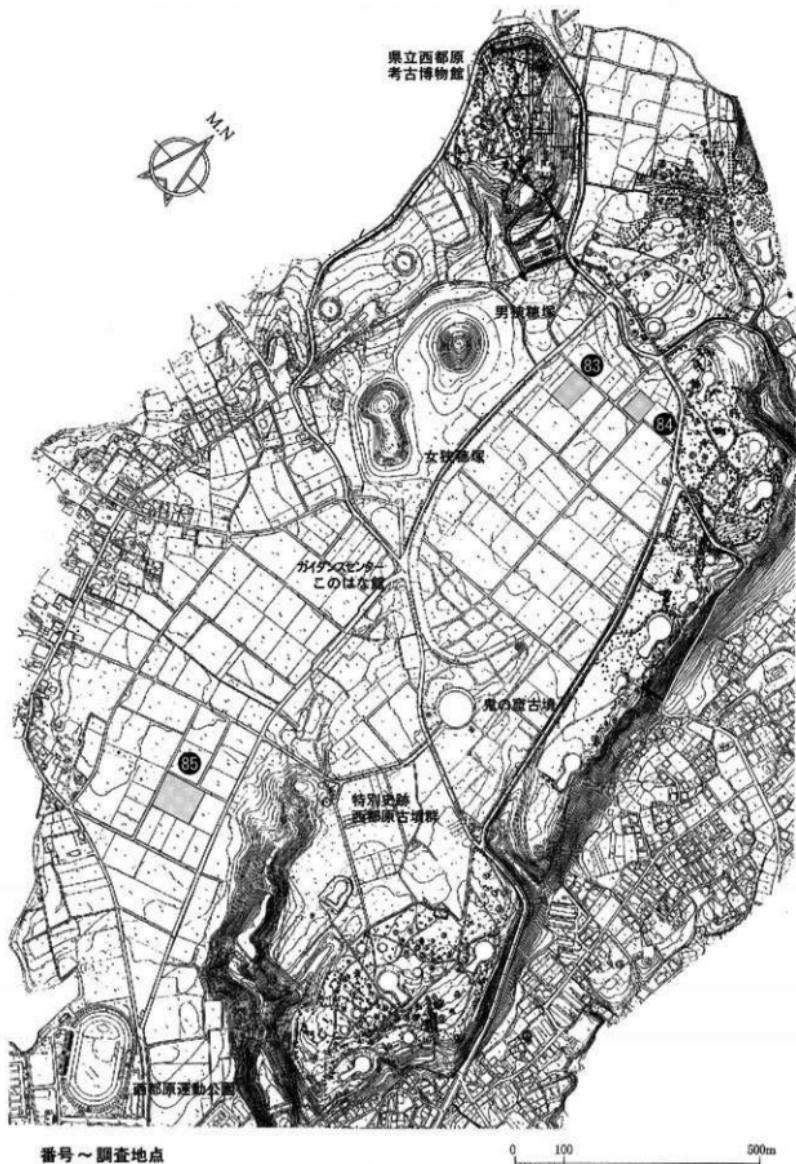
このような中、平成9年頃から天地返しの波が西都原台地にも押し寄せ、それを、西都たばこ耕作組合が取りまとめ、西都原台地における天地返しが日々的に行われることになった。そこで、西都市教育委員会によって、平成10年度から15年度まで確認及び本調査を実施し、平成16から17年度にかけてはそれをまとめて本報告した。

しかし、本年度再度地権者からたばこの天地返しに伴う調査をしてほしいとの要望があり、協議の結果、これまで同様、遺構・遺物が広範囲に検出された場合には本調査を来年度実施することを条件に確認調査を行った。

なお、西都原遺跡は、寺原・丸山・原口・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼称で、寺原遺跡は台地の南西部で寺原集落を含む地域、原口遺跡はその南側で、西都原運動公園の北側一帯を含む地域、丸山遺跡は台地北部地域、西都原遺跡は台地中央部から南東部を含む地域である。

調査方法は、畑地の形状に合わせ、幅約2mのトレンチを8~15m間隔に設定し、遺構・遺物の遺存状況等の確認を行った。そして、遺構・遺物等が確認された場合には、トレンチをさらに拡幅及び増設して詳細な調査を行った。

検出は、アカホヤ火山灰層を基本に3地点（第83~85地点）行った。また、アカホヤ火山灰下層の文化層については、各トレンチ内に幅2×2m程のサブトレンチを設定して、遺構・遺物の遺存状況等の確認を行った。



番号～調査地点

0 100 500m

Fig. 2 西都原地区遺跡調査地点位置図 (1/10,000)

## 第2節. 調査の記録

### 1. 遺構と遺物

#### (1) 第84地点 (Fig. 3)

第84地点は西都原遺跡の最北部に位置した標高約65.5mの畠地である。東側一帯には大小の前方後円墳を中心に構成された第2古墳群、北側一帯には小円墳で構成された第3古墳群が所在している。

また、本対象地の北西には隣接して駐車場が所在しているが、この駐車場は平成15年度に西都市教育委員会によって事前調査を行っており、その際、縄文晩期の竪穴住居跡1軒及び弥生時代後期前半の竪穴住居跡5軒を検出し、さらに、弥生時代後期前半の竪穴住居跡からは多くの石器が出上し、住居内において石器を製作していた痕跡を確認した。

現況は平坦であるが、アカホヤ火山灰層が遺存しているのは全体の1/3程度（南側）で、その他は黒褐色及び褐色ロームでかなり削平されていた。

調査の結果、遺構として旧地形と溝を検出した。検出面はアカホヤ火山灰層及び黒褐色ロームである。

この溝は、南側の幅が狭く浅く、北に行くに従って広く深くなっている。これは、本対象地の北側が一段低くなっている、そこに向かって雨水が流れていたものと思われる。

規模的には、現存長約40.0m、南部で幅0.22m・深さ0.03m、中央部で幅1.85m・深さ0.48m、北部で幅1.95m・深さ0.76mを測る。そして、溝床面の高さは、南側で64.97m（標高）、中央部で63.67m、北側で62.83m、その比高差2.14mを測り、このことからも南から北へ傾斜していることが見て取れる。

遺物はほとんど出土しておらず、時期的なことは不明である。

#### (2) 第85地点 (Fig. 4)

第85地点は、西都原運動公園の北西約500m、原口遺跡内に位置した標高約64.4mの畠地である。周辺には、東約150mに第65地点（平成14年度調査）が所在しており、縄文時代早期の集石遺構や弥生時代後期の竪穴住居跡等を検出している。また、北側農道を隔てた北東には7世紀の土壙墓を検出した第52地点（平成12年度調査）、さらに、西約350mには古墳時代初頭から前期の竪穴住居跡群等を検出した第81地点（平成15年度調査）が所在している。

現況は平坦であるが、アカホヤ火山灰層が遺存しているのは全体の3/5程度で、南側は黒褐色ロームが検出面で、東側は段落ちとなっており、そこに盛上されていた。

調査の結果、本対象地の北東隅で竪穴住居跡1軒を検出した。検出はアカホヤ火山灰層面である。竪穴住居跡は方形プランで、規模的には長軸3.40m・短軸3.32m、検出面からの深さ0.15~0.30mを測る。床面はほぼ平坦で、張床が施されていた。主柱は、住居内にはそれらしきものを確認することができなかったが、東西の外側中央部にそれぞれ1個ずつの小さな柱穴を検出しており、それが主柱である可能性が高いと思われる。

遺物は南西隅に集中しているが、ほとんど同一個体と思われる。1は広口壺の頸部から胴部にかけてのもので、表面は頸部がヨコ方向のハケ日、胴上部はヘラ磨き調整が施されている。裏面は上部がヨコハケ後、ヘラ磨き調整が施されているが風化が著しい。下部は右下斜め方向のハケ目調整が施されている。時期的には共伴遺物から弥生時代後期のもと推定される。

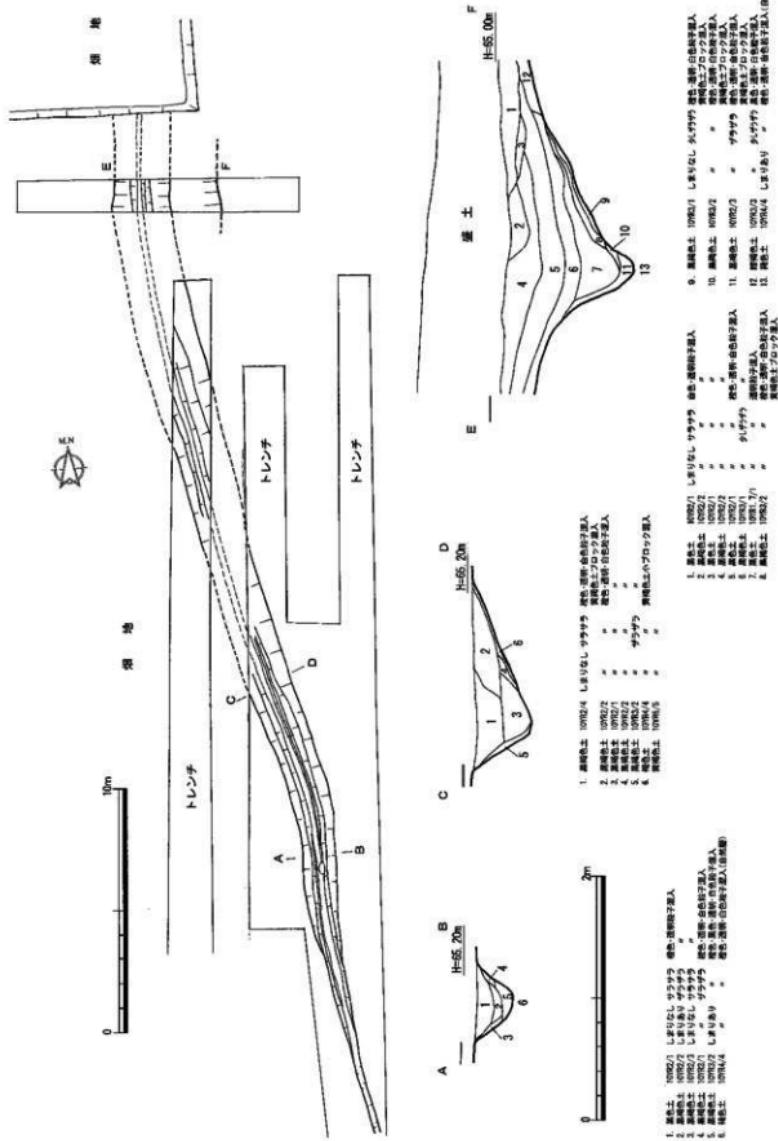


Fig. 3 第84地点溝窓測図及び土層図 (1/200・1/40)

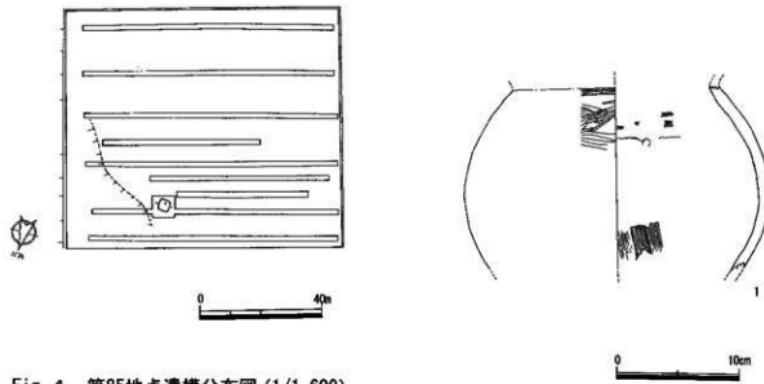


Fig. 4 第85地点遺構分布図 (1/1,600)

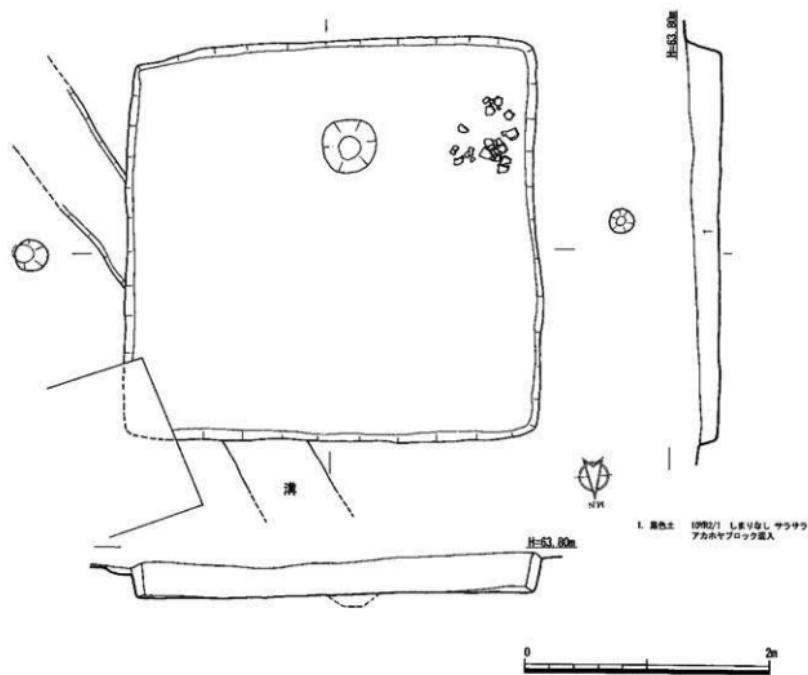


Fig. 5 第85地点住居跡実測図・出土遺物実測図 (1/40・1/4)

### 第3節 小結

西都原台地では、童子丸墓地造成に伴う発掘調査（新立遺跡<sup>(1)</sup>）をはじめ、圃場整備等に伴い行った大規模な発掘調査（西都原地区遺跡<sup>(2)</sup>）や平成10～15年度までのたばこ耕作の天地返しに伴い実施した発掘調査（西都原地区遺跡<sup>(3)</sup>）、道路拡幅工事等の各種開発行為に伴う発掘調査（寺原第1遺跡・寺原第4遺跡・西都原遺跡等）によって様々なことが判明してきた。

新立遺跡では、縄文時代早期の集石遺構や古墳時代初頭頃の竪穴住居跡を検出した。また、圃場整備に伴って実施した西都原地区遺跡では、縄文時代早期の集石遺構をはじめ、弥生時代中期から古墳時代初頭頃の竪穴住居跡や古墳時代後期の横穴墓群、さらには中世の掘立柱建物跡などを検出した。さらに、たばこ耕作の天地返しに伴い実施した西都原地区遺跡の調査では、寺原遺跡（第81地点）において古墳時代前期を中心とする竪穴住居跡群を検出し、その他原口遺跡（第60・65地点）、西都原遺跡（第17・24・39地点）、丸山遺跡（第62地点）から弥生時代後期から終末期の竪穴住居跡等を検出した。この報告書の中で、西都原台地における遺構密度は、弥生時代の竪穴住居跡が台地北部・中央部・南部にまたがっているものの薄いのに比べ、古墳時代特に初頭から前期になると新立遺跡や第81地点を中心とした地域に多く分布するようになり、全体的に非常に高くなってきており、古墳時代になるとかなりの人たちが流入し大集落が形成され、生活環境が変化したと同時に繁栄してきたこと。また、前期の後半以降となると極端に検出例が少なくなるが、この時期は西都原古墳群が盛んに築造される頃と重なっており、いわゆる台地上は聖地として認識して、生活空間の移動が行われたものではないかと思われると推論した。

このような中、第85地点から弥生時代後期の竪穴住居跡を検出したが、これも単独である。このことは、遺構密度がかなり薄いことを意味しているが、前途した第84地点に隣接した駐車場（西都原遺跡<sup>(4)</sup>）のように、弥生時代後期前半の竪穴住居跡が5軒も検出された例もある。但し、重複はしていないことから、古墳時代の初頭に急激に生活環境が変化するほどの大集落が形成されたのではなく、その以前の弥生時代後期にはある程度の規模の集落が所在していた地域があったことが判明した。しかし、まだまだ全体的な様相を明らかにするにはまだまだ資料に乏しく、今後の大きな課題である。これまでの調査によって、様々なことが判明し報告してきたが、まだまだ未解明な部分が多いというのも現状であり、今後実施される発掘調査等によって、さらに検討していくなければならないと考える。

#### 註

- (1) 西都市教育委員会「西都原地区遺跡Ⅱ」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第44集 2006
- (2) " " 「西都原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第45集 2006
- (3) (1)と同じ
- (4) 西都市教育委員会「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- (5) " " 「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (6) (1)と同じ
- (7) 西都市教育委員会「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集 1985
- (8) 西都原古墳研究所「西都原古墳研究所年報」第5号 1988
- (9) " " 「西都原古墳研究所年報」第11号 1994
- (10) (1)と同じ
- (11) (2)と同じ

## 第IV章 日向国分寺跡の調査

### 第1節 これまでの成果結果と概要

日向国分寺跡については前述のとおり、昭和23年度に日向考古調査団、昭和36年度に九州大学及び宮崎県教育委員会、平成元年度に宮崎県教育委員会が確認調査を実施している。昭和36年度は旧五智堂周辺及び推定南北中軸線と寺域南東側、平成元年度は寺域北側（中央東西道路の北側）の確認調査が実施され、これらとは別に昭和47年度には寺域東側の宅地開発に伴い、宮崎県教育委員会及び西都市教育委員会が緊急調査を実施している。昭和23・36年度の調査は短期間であったことから、伽藍配置や建物跡については明確にされていないが、平成元年度の宮崎県教育委員会による調査では僧坊跡ないし食堂跡と推定される2時期の掘立柱建物跡が確認されている。これら成果を受け、西都市教育委員会は平成7年度より確認調査を実施し、今年度で第12次となる。

これまでの調査成果を概観すると、平成7・8年度は推定金堂掘込地業跡・回廊跡・回廊外側に廻らされた溝状遺構を検出した。平成9年度は主要伽藍西側の回廊に取り付くと予想される四脚門跡、四脚門の前で途切れ南北に延びる区画溝を検出した。平成10年度は回廊が最低でも3時期所在したこと及び主要伽藍南側東西区画溝から伽藍の東西幅が81mと判明した。平成11年度は中門も回廊同様、最低3時期所在したことを確認した。平成12年度は平成7年度に確認された金堂掘込地業跡が地業跡でないこと、また、南門想定箇所から築地塀の基壇らしき粘土層が確認され、調査区東側に南門が所在する可能性が浮上した。また、塔想定箇所である主要伽藍南東側で遺構等は検出できなかった。平成13年度は推定僧坊跡ないし食堂跡の未調査箇所を調査し、2時期の掘立柱建物跡であることを再確認した。平成14年度は寺城南西側施設の確認に限定し、寺域を方2町と想定した場合の南西隅と予想される2箇所の調査を実施したが、寺域端を示すような遺構は確認できなかった。但し、想定寺城南西端に国分寺と同時期で同一地割りのL字状の溝状遺構を検出した。平成15年度は伽藍中心部の調査を重点的に実施し、方形及び円形の柱掘りかたを有する桁行7間、梁行3間ないし4間の推定講堂跡の西側3分の1程を検出した。また、伽藍南東側で方形の柱掘りかたを有する東西3間、南北3間以上の南北掘立柱建物跡を検出した。平成16年度は回廊が金堂に取り付く構造か否かを検討する目的で推定金堂跡周辺の調査を実施したが、金堂跡を特定できるような遺構は確認できなかった。また、推定講堂北西側で東西区画溝を検出し、区画溝は講堂背後で途切れ、背後への通路が確保されていることが確認できた。推定寺域北西側の宅地造成に伴い調査も実施したが、寺域端を示すような遺構は検出できなかった。平成17年度はこれまでの調査で国土座標が設置されていなかった遺構の座標計測と伝塔芯礎下部の構造検討、講堂跡西側の農業用倉庫解体に合わせ確認調査を実施した。農業用倉庫下から南北柱穴列が検出できたが、東西回廊跡と予想される柱穴等は検出できなかったことから、回廊は金堂に取り付く構造である可能性が高いと判断した。また、伝塔芯礎は元位置を保っておらず、後世に移動されていることが明らかになった。

上記調査成果を踏まえ、平成18年度の調査は国史跡指定条件を満たすための確認調査最終年度とし、日向国分寺跡調査指導検討委員会で検討した内容を踏まえ、推定金堂基壇南東側をA区、伽藍外側を廻る区画溝北東隅想定箇所をB区、伽藍内西塔配置を想定した場合のC区、寺域を1.5町四方で想定した場合の南門想定箇所をD区、その西側をE区とし調査区を設定した（Fig. 6 参照）。

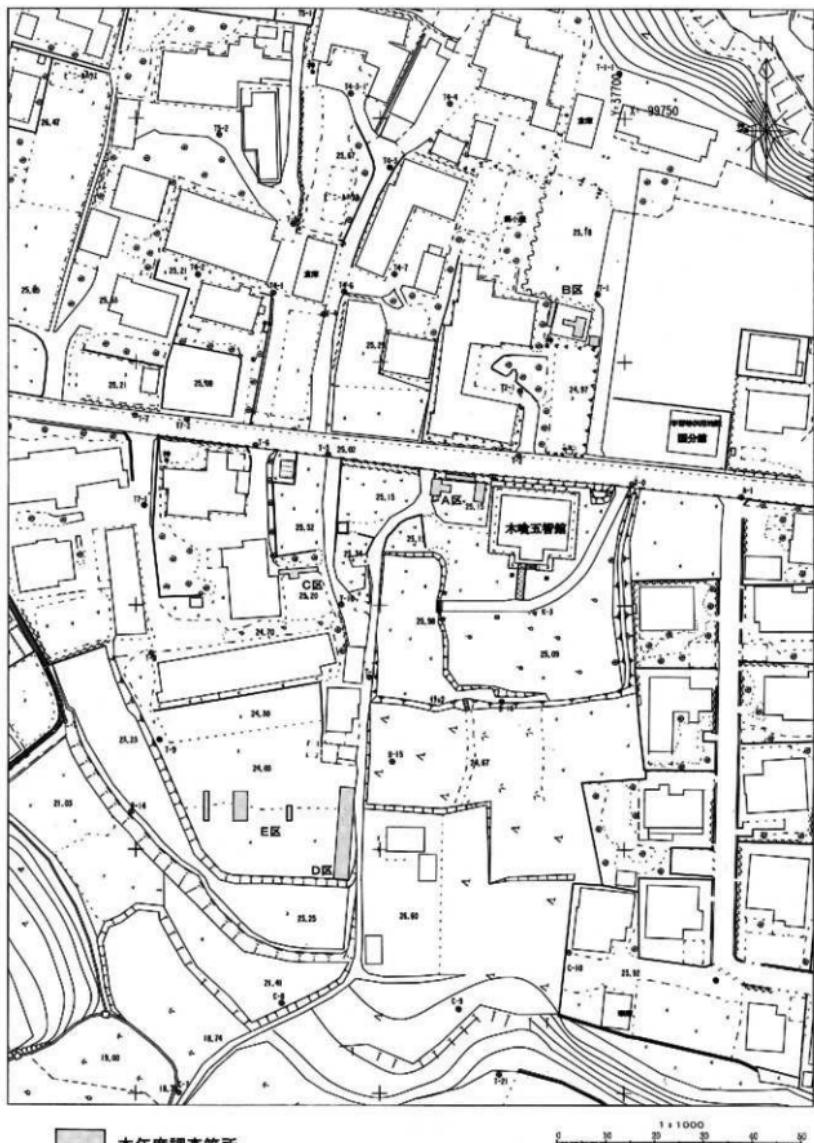


Fig. 6 日向国分寺跡第12次調査箇所位置図 (1/1,000)

## 第2節. 調査区の設定と遺構

### 《A区の調査》 Fig. 7

A区は平成18年8月31日から調査を開始した。調査予定箇所には墓地の目隠しとしてヒトツバの木が植栽されていたことから、これらを仮植えする場所に第1トレント（ $1 \times 6\text{ m}$ ）を設定した。この墓地北側は十年程前に土葬から改葬し、かなりの攪乱を受けていると予想されていた。

調査の結果、現表土から約30cm掘削した地点でトレント北側にアカホヤ火山灰上層の黒色粘質土（国分寺跡遺構検出面）が一部検出できたが、南側は墓地改葬により既に攪乱を受けていた。

第1トレントから遺構が検出されなかったことから、予定どおりヒトツバの木を移植し、伝塔芯基礎北側の調査予定箇所に第2トレント（ $2 \times 3.5\text{ m}$ ）を設定した。

調査の結果、上層から多量の川原石を検出した。これら川原石は、現在、国分寺への通路となっている箇所が以前、窪地であり、それを嵩上げするため戦後人為的に埋められたものと判明できたことから除去し調査を進めた。川原石を取り除くとトレント中央部から北側にかけ黒色粘質土の硬化層を検出した。また、この硬化層の南と東側には川原石が数個張り石状に配されていた。トレント南側には人為的に埋められた黄色砂層が検出でき、東側への延びが確認されたことから、第2トレント東側に第3トレント（ $1.5 \times 2\text{ m}$ ）を設定した。

調査の結果、3トレント南側に明褐色粘質土を検出し、何らかの基壇の可能性も示唆したが、聞き取り調査の結果、後世に東西道路側の窪地を埋めた客土であることが判明したことから除去した。また、その下層から黄色砂層を検出したが客土であると判断し取り除いた。調査終盤になりトレント南東隅から人頭大の川原石を円形に3段ほど積み上げた石組み遺構が検出された。この石組みの遺構の性格は不明であるが、遺物の出土状況等から古代の所産である可能性が高い。

第2・3トレントの調査に併行して、第4トレント（ $2 \times 4\text{ m}$ ）を調査区東側に設定したが、改葬により攪乱していることが明確になったことから、掘削途中で埋め戻し、調査を終えた。

以上、第2トレント中央部西側から東側に延び北上する黒色硬化層は、これまで他では検出したことがなく川原石及び砂岩の切石が硬化層の南・東側に配されていること、また、平成15年度に検出した講堂西側を推定中軸線で東側に折り返し講堂を復元した場合、本地点で確認された硬化層南東隅と復元講堂東面柱穴列がほぼ一致することが判明したことなどから本遺構は金堂基壇の南東隅の可能性が高い。

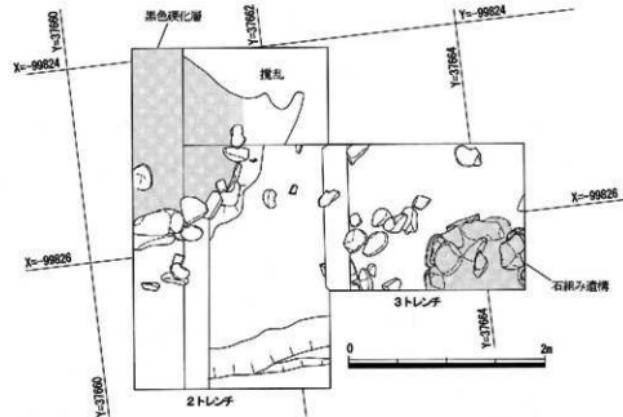


Fig. 7 A区 2・3トレント平面実測図 (1/50)

### 《B区の調査》Fig. 8

B区はA区に先行し、平成18年8月7日から調査を開始した。これまでの調査で回廊に平行して廻ることが明らかになった区画溝を北東隅でも確認するため、まず、車庫西側を掘削することとした。調査箇所は大変狭小だったことから、小規模な第1トレンチ（1×5m）を設定した。

調査の結果、第1トレンチ南側で古瓦の集中箇所が検出できたが、区画溝と判断される溝の掘りかたは確認できなかった。しかし、古瓦が集中していた箇所は平成16年度に伽藍北西側で検出した東西区画溝の延長線上に位置することから、区画溝の上部が後世に削平を受け、辛うじて溝底に包含されていた古瓦のみが遺存したものであろうと予想される。

第1トレンチでの区画溝の遺存状況が良好でなかったことから、車庫内に第2トレンチ（2×4m）を設定し、再度区画溝の検出に努めた。

調査の結果、アカホヤ火山灰層は既に削平されており、その下層の黒褐色ローム層から不整形の窪みや柱穴と予想されるピットが数基検出できたが、第1トレンチ同様に区画溝を検出することはできなかった。

これを受け、第2トレンチ西側に第3トレンチ（1×2.5m）を設定し、区画溝の検出に努めたが、第2トレンチ同様に区画溝を検出することはできなかった。

また、平成11年度調査の際に伽藍東側区画溝北端を検出した箇所に4トレンチ（2×2m）を設定し、区画溝の北・西側への延びを探ったが、区画溝は以前確認していた地点で途切れていった。

これらのことから、本地区に区画溝が所在していたと想定した場合、後世の土地改変により既に全てを削平されてしまった可能性が高い。しかし、東側区画溝北端が検出できていること、また、平成7～9年度の調査で伽藍南東隅では弧を描きながら中門に向かって屈曲していることが判明していることなどから、伽藍北側では布掘り状に掘り残されている可能性もある。

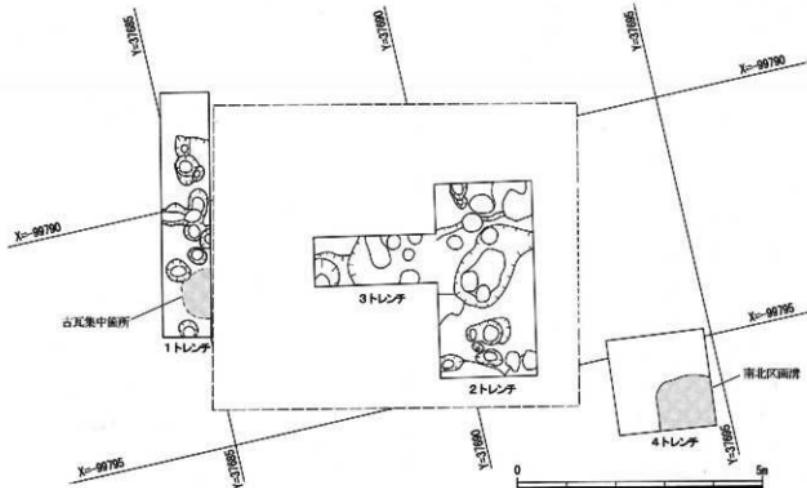


Fig. 8 B区1～4トレンチ平面実測図(1/100)

《C区の調査》Fig. 9

C区は平成18年10月2日から調査を開始した。本地区は現状で基壇痕跡等は遺存していないが、伽藍内西塔配置を想定した場合、中門跡と推定金堂跡のほぼ中央に位置すること、また、中軸線を東側に折り返した箇所に憧竿支柱を据えた柱掘りかたとも想定される大型円形土坑2基が所在していることなどから、この地点に塔跡が所在する可能性が最有力視された。これまでの調査では塔跡と判断できる明確な遺構が検出されておらず、基壇全てが削平されている可能性が高い。しかし、仮に塔基壇が全て削平されていても、塔を建立する際、基壇下に掘削されたであろう掘込地業跡が遺存している可能性は予想されたことから調査を実施した。調査箇所は民有地で家庭菜園及び通路として利用されており、西側に所在する倉庫への東側通路のみが掘削可能であったことから、ここに第1トレンチ（1～2×8m）を設定した。

調査の結果、後世にかなり擾乱を受けたアカホヤ火山灰上層の黒色粘質土がほぼ全面に遺存していたが、不整形の窪みや後世の擾乱等が検出されたのみで、掘込地業と想定されるような遺構は検出できなかった。また、平成12年度に調査を実施した本地区北側で南北柱穴列を検出していたが、この延びも検出できなかった。トレンチ東端では昭和36年調査時の第12トレンチを検出し、そのトレンチ内及びすぐ西側に幅1m程の長方形土坑を2基検出した。西側の土坑内からは人骨や棺蓋の一部と予想される木片及び布切れ等が出上したことから、これら土坑は昭和36年に北西土壤南側を調査した際に検出された、近世ないし近代の墓であると判断した。

以上の結果をまとめると、本地区で塔痕跡は検出できず、塔基壇を構築する際に仮に掘込地業が行われていれば本トレンチに必ず遺構が確認されているはずであり、西塔配置の可能性は低いと予想される。しかし、塔の所在が想定される伽藍南側の東西地区や伽藍内東側の調査でも掘込地業は検出されておらず、掘込地業を行わない手法で塔が建立されたと考えると、塔基壇の全てが削平されたとする他ない。このように考えたとき、平成7年度に検出された伽藍内東側の大型円形土坑2基の存在は不可解である。つまり、憧竿支柱を建てた支柱の掘りかたと推定すると一般的に東西方向で掘削されるべき柱掘りかたが南北並びであることや直径約2m、現表土からの深さも約2mと巨大であること、また、九州内の他の国分寺跡での検出例がないことなどから考えにくい。現段階で塔は壇ノ島分寺のように当初掘立柱であったか、または、この大型土坑が塔芯柱を据えるための坪地業であったのかと考えるしかない。

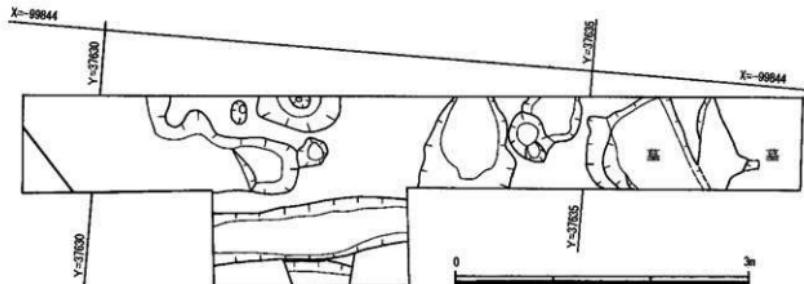


Fig. 9 C区1トレンチ平面実測図(1/50)

### 《D区の調査》Fig. 10

D区は平成18年9月25日から調査を開始した。これまで寺域の調査は数度行ってきたが、明確に寺域を示す遺構が明らかになっていなかったことから、南門を検出する目的で調査区を設定した。

日向国分寺の寺域は方2町程度とされてきたが、推定寺域である北東側の畝を平成元年度に宮崎県教育委員会が調査した際、南北柱穴列が検出された。この柱穴列を寺域関連遺構とし推定中軸線より復元すると寺域東西幅は約150mとなる。正方形の寺域を想定し、主要伽藍西門の中央を寺域南北の中心線とし導き出した南側の地点に調査区を設定した。また、平成11年度の調査で東側林内に東西区画溝を検出していたことから、本地点から南門跡ないしは区画溝が検出される可能性が予想されたことから、まず、第1トレンチを(2.5×4.5m)設定した。

表土から20~30cm程掘削した地点でアカホヤ火山灰層下層の黒褐色ローム層が検出できたことから既にかなりの削平を受けていることを確認し、この黒褐色ローム層を遺構検出面とした。

調査の結果、第1トレンチ南側に東側から延び、トレンチ内で途切れると予想される溝状遺構1条とトレンチ東側に南北帶状に明褐色粘質土が検出された。トレンチ東側の明褐色粘質土を掘削した結果、昭和36年調査時の第1トレンチであることが判明した。当時のトレンチは本地点をほぼ北端にし、南側へ35.5m掘削されている。このトレンチ内埋土を全て掘り上げた結果、鬼界カルデラ噴出火山灰(シラス)まで達していることが判明した。当時の調査報告書に寺域には黄色砂粒土が人為的に敷設されているとの記載があるが、その後の調査で黄色砂粒土層と予想される層が検出できなかったことから、アカホヤ火山灰層が黄色砂粒土層ではないかと疑問を抱いていた。今回、昭和36年調査時の1トレンチを掘り上げた結果、シラス火山灰層上面でトレンチの掘削が終了していたことから、当時の調査ではアカホヤ火山灰層を検出する目的で掘削を行った結果、アカホヤ火山灰とシラスを同一の黄色砂粒土と誤認し、

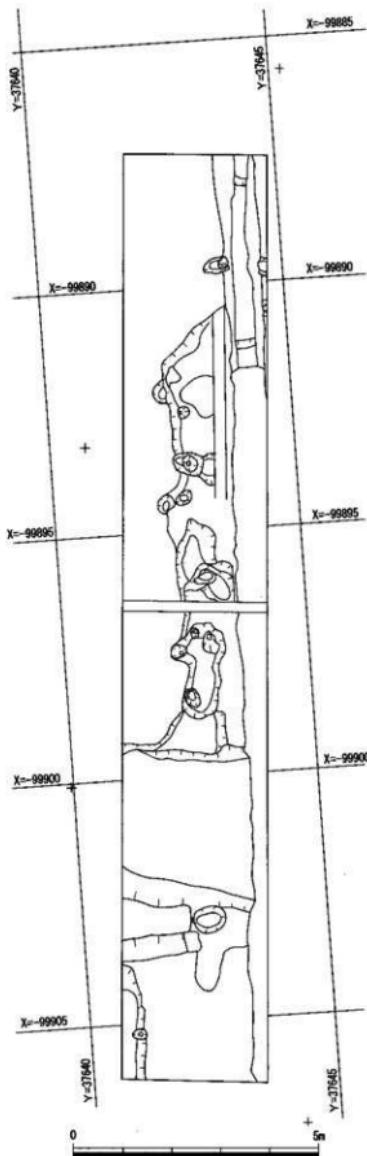


Fig. 10 D区1~3トレンチ平面実測図(1/100)

本来遺構検出面とすべきである黒褐色ローム層を掘り抜いてしまった可能性が高い。

今回、設定した第1トレンチ南東側からは黒褐色ローム層に掘り込まれた溝状遺構が1条検出され、国分寺当時の古瓦や川原石のみが包含されていたことから、国分寺の遺構は黒褐色ローム層で検出されることが明らかになった。この溝状遺構の検出できた東側延長上には平成11年度に調査を実施した際、B区第2・3トレンチから東西区画溝を検出していることから、このラインで何らかの区画がなされていたと予想される。第1トレンチで確認された溝状遺構を区画溝と判断した場合、深さが20cm程しか遺存していないことから、既に上部をかなり削平されていると予想される。東側で検出している区画溝は深さ1mを越し、今回、検出できた溝を区画溝と判断すれば80cm以上が削平されていると予想され、この地点に仮に南門が所在していたとしても、既に柱穴痕は削平されてしまっている可能性が高い。

平成14年度、本調査区の南側に調査区を設定し調査を実施した。この箇所は以前から国分寺の寺域を方2町と想定した場合の南端にあたると予想され、調査区を設定したが、南門跡と予想される遺構等は検出できていない。但し、この南西側（平成14年度D区2トレンチ）で浅い不整形の窪み内から鉄鋸や轆の羽口が出土し、簡易な鍛冶が行われていたことが明らかになっている。

現在、第1トレンチと平成12年度に調査したD区第1トレンチの間は竹や草が背丈以上に生い茂っている箇所はあるが、この間で南門跡が検出される可能性も想定されたことから、第1トレンチ南側に第2・3トレンチ（共に3×5m）を設定し、調査を実施した。

調査の結果、第2・3トレンチとともに柱穴痕など検出できず、南門の所在を特定できるような遺構は検出できなかった。最終的には第1～3トレンチ間を繋ぎ一つの調査区とし調査を実施した。

その結果、第1トレンチで検出していた溝状遺構は不整形土坑であることが判明した。したがって、本地点には区画溝はなく、寺域南端として良いかについては不明である。

### 《E区の調査》

A～D区の調査を全て終了し、平成19年1月10日からD区の西側に約18m離れた箇所に第1トレンチ（3×6m）を設定し、E区とした。本調査区はD区で検出されると予想された区画溝などの寺城南端施設の検出を目的に、平成9年度にC区として調査を実施したトレンチに重ね設定した。

調査の結果、今回、第1トレンチ南側にも平成9年度調査の際に検出した黒褐色ローム層を検出ましたが、トレンチの中央やや南から北端まで瓦片や土器片が含有される黒色の土器包含層を検出した。当初、調査箇所は近半まで畑として利用されていたことから、この黒色土も土地改良などによる搅乱と予想したが、黒褐色ローム層検出面から約1m掘削し地山を検出したことから、かなり深くまで人為的に掘削されていることが確認できた。地山まで掘削する途中で平瓦を転用した竈らしき遺構2基や造存状態の良い丸瓦や上師碗などが出土したことから、この黒色土をある程度埋めた段階で炊飯施設等が建設された可能性がある。この包含層の広がりを確認するため第1トレンチの東西に第2トレンチ（1×3m）、第3トレンチ（1×6m）を設定し調査をした結果、両トレンチでも包含層が確認でき、かなり大規模な造成が行われていることが判明した。北側への広がりも確認したかったが、野菜等の栽培が行われていたことから、調査することはできなかった。

### 第3節 小結

今年度の調査は、金堂・塔・南門跡の検出及び伽藍北東東西区画溝の有無確認などを目的に調査を実施した。調査の結果、各建物や溝を特定することはできなかったが、各地点でそれぞれの成果が得られたことから、以下、今年度の調査成果をまとめて記す。

まず、金堂跡については、A区第2トレントから2段程積まれた川原石や一辺30cm程の砂岩切石に囲まれ、内側から人為的に叩きしめられたと予想される黒色硬化層を検出した。この硬化層はトレント西端から50cm程東に延びた後、弧を描きながら北側に延びている。この硬化層のトレント西側を10cm程掘り下げてみたが版築を行ったような互層状の土質の差は認められなかった。しかし、掘り下げた範囲は上層同様に叩きしめられていた。したがって、この基壇状遺構は金堂基壇の南東隅である可能性が高い。この硬化層を金堂基壇の南東隅と推定し、回廊が金堂に取り付く伽藍配置を復元した場合、回廊は現在の東西道路下に比定される。また、この硬化層の南東側第3トレント南東隅からは川原石を3段程積み上げた円形の石組み遺構が検出された。この石組み遺構の性格は明らかにし得なかったが、金堂に関連する遺構である可能性が高い。

次に塔跡については、平成7年度の調査で中門と金堂の中央東側で大型土坑2基が検出されており、憧竿支柱を立てた柱掘りかたの可能性があることから、その逆方向の西側に塔の所在を想定し調査を実施した。調査の結果、基壇痕跡や掘込地業跡は検出できなかった。塔自体が掘込地業を行わない構造で建立され、基壇ごと削平されていれば塔の所在を検討することは大変難しいと思われるが、東側と同様な土坑なども検出されなかつたことから、現在、憧竿支柱の掘りかたと想定している大型円形土坑が塔関連施設である可能性が一段と高まった。

伽藍北東端の区画溝については平成16年度の調査で伽藍北西側区画溝を検出したことから、東側も確定する目的で調査を実施した。調査の結果、所在を明らかにすることはできなかったが、区画溝想定箇所に古瓦の集中箇所が認められ、東西区画溝が所在していた可能性が高い。また、区画溝のコーナーは伽藍南東側で弧を描きながら屈曲することがわかっているのみで、全てのコーナーが同様にならない可能性も高く、伽藍南側のみの中門前面以外で全周する可能性もある。これについては、現在、それぞれの伽藍隅に家屋等が所在することから調査を実施することは不可能である。

最後に南門跡想定箇所については、平成元年度の県教委調査の際に検出した南北柱穴列から単純に寺域を正方形プランで復元した結果、導かれた箇所の調査であることからあくまでも確認として調査区を設定したが、南門に伴う柱穴や東西区画溝、築地塀痕跡などの遺構は検出できなかった。しかし、本地点は既に上部をかなり削平されていることが明らかになったことから、南門に伴う遺構は既に削平されてしまっている可能性もある。しかし、この地点から20m程南に下るとかなり高低差のある段落ちになり、その南側は谷になることから、以前から想定されてきたように、この周辺に寺域南端を想定することが妥当であろう。今年度の調査は寺域を方1.5町と想定し南門の検出を進めてきたが、寺域の南北が長くなる例も多く見られ、一概に正方形の寺域を想定することはない。

以上、今年度の調査成果と成果から導かれる所見を述べてきた。今年度までの調査で現時点で調査可能な箇所の調査をほぼ終了し、今後、早急に国史跡指定を進めなければならない。これまでの調査成果で本遺跡を日向国分寺跡として指定することができるかは課題であり、今後、建物の配置状況や出土遺物の検討、地名の検討などを進め、平成20年度までに第12次にわたる確認調査の本報告書を発刊する予定である。その後、国史跡指定を目指し、本遺跡の保存を図りたいと考える。

# 図 版

## (PLATES)

### 図版目次

#### —西都原地区遺跡—

P L. 1

1. 第83地点トレンチ調査状況①
2. 第83地点トレンチ調査状況②
3. 第83地点アカホヤ火山灰下層調査状況
4. 第84地点トレンチ調査状況①
5. 第84地点トレンチ調査状況②
6. 第84地点溝掘削前状況

P L. 2

7. 第84地点溝検出状況
8. 第84地点溝土層
9. 第85地点トレンチ調査状況
10. 第85地点竪穴住居跡内遺物出土状況
11. 第85地点竪穴住居跡検出状況

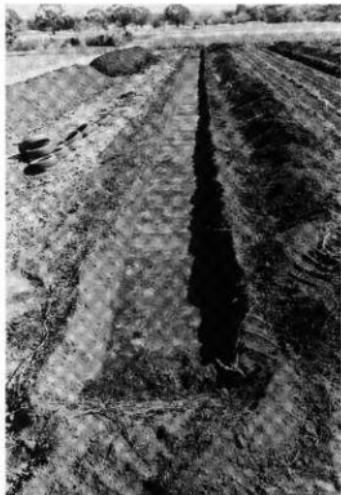
#### —日向国分寺跡第12次—

P L. 3

12. A区全景(南より)
13. A区2・3トレンチ遺構検出状況(西より)
14. A区推定金堂基壇跡と石組み遺構(北西より)
15. A区推定金堂基壇跡(南東より)
16. B区全景(東より)
17. B区1トレンチ瓦溜検出状況(南より)
18. B区2トレンチ遺構検出状況(南西より)
19. B区2・3トレンチ遺構検出状況(東より)

P L. 4

20. C区全景と1トレンチ掘削状況(東より)
21. C区1トレンチ墓坑完掘状況(南東より)
22. C区1トレンチ完掘状況(東より)
23. D区1~3トレンチ掘削状況(北より)
24. E区全景とトレンチ配置状況(北西より)
25. E区1トレンチ調査状況(南より)



1. 第83地点トレンチ調査状況①



2. 第83地点トレンチ調査状況②



3. 第83地点アカホヤ火山灰下層調査状況



4. 第84地点トレンチ調査状況①



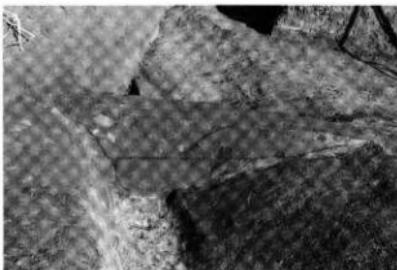
5. 第84地点トレンチ調査状況②



6. 第84地点溝掘削前状況



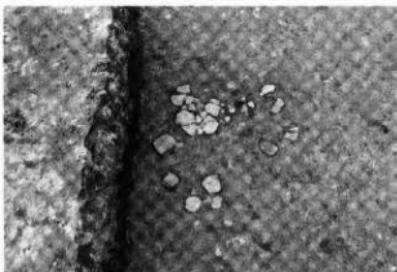
7. 第84地点溝検出状況



8. 第84地点溝土層



9. 第85地点トレンチ調査状況



10. 第85地点竪穴住跡内遺物出土状況



11. 第85地点竪穴住跡  
検出状況



12. A区全景(南より)



14. A区推定金堂基壇跡と石組み遺跡(北西より)



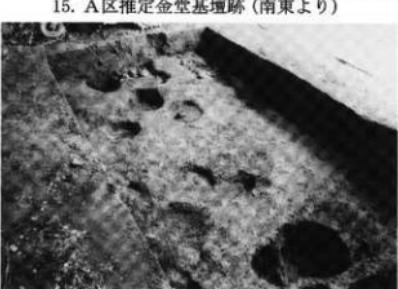
13. A区2・3トレンチ遺構検出状況(西より)



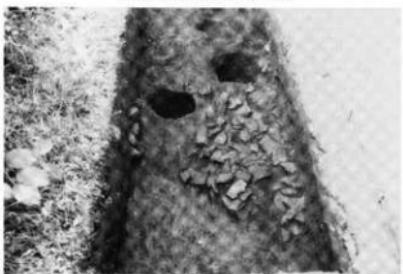
15. A区推定金堂基壇跡(南東より)



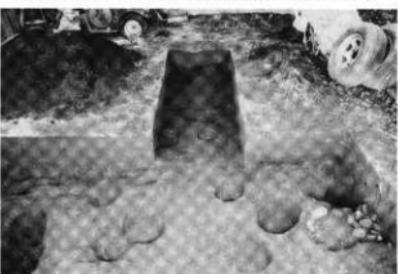
16. B区全景(東より)



18. B区2トレンチ遺構検出状況(南西より)



17. B区1トレンチ瓦溜検出状況(南より)



19. B区2・3トレンチ遺構検出状況(東より)



20. C区全景と1トレンチ掘削状況（東より）



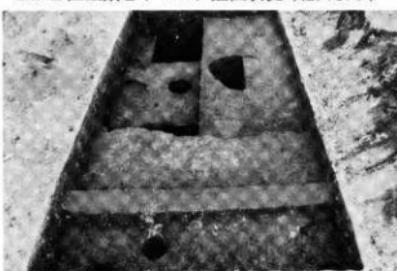
21. C区1トレンチ墓坑完掘状況（南東より）



22. C区1トレンチ完掘状況（東より）



23. D区1～3トレンチ掘削状況（北より）



25. E区1トレンチ調査状況（南より）

# 報告書抄録

ふりがな	さいとばるらくいせき・ひゅうがこくぶんじあと
書名	西都原地区遺跡・日向国分寺跡
副書名	市内遺跡発掘調査概要報告書
卷次	第12集
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第49集
編著者名	義方 政幾・笠瀬 明宏
編集機関	西都市教育委員会
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111
発行年月日	西暦 2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )
		市町村	遺跡番号	北緯	東経		
さいとばるらくいせき 西都原地区遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおあさみやあさごくぶ 大字三宅宇国分	452084	1026	32° 06' 45"	131° 24' 15"	20061107	2,430.0
			1029	32° 07' 34"	131° 23' 30"	20070110	
ひゅうがこくぶんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんひいとし 宮崎県西都市 おおあさみやあさごくぶ 大字三宅宇国分	452084	1008	32° 06' 06"	131° 23' 46"	20060803	137.5
				32° 06' 10"	131° 23' 49"	20070328	

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たばこ耕作天 地返しに伴う 調査	生活遺構	弥生	竪穴住居跡 溝	弥生土器	
遺跡所在確認 に伴う確認調査	国分寺	奈良～平安	推定金堂基壇跡 石組み遺構 区画溝 瓦窯 不整形土坑 墓坑(近世or近代)	軒丸瓦 丸・半瓦 土師器皿 土師器壺 上師器高台付壺 須恵器壺蓋	金堂基壇と推定 される礎化層及 び石組み遺構を 検出

---

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第49集  
「市内遺跡発掘調査概要報告書XII」  
西都原地区遺跡・日向国分寺跡  
平成19年3月30日発行  
編集発行 西都市教育委員会  
印刷所 (有)河野印刷所

---

